



妙たえ の光ひかり

通刊40号 復刊17号

1996年4月8日(季刊)

角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜

〒953 TEL0256-77-2025

雪割草

早春の角田山で、一番初めに彩りを見せる花が福寿草と、この雪割草。ことに雪解けとともに可憐で美しい色合いを見せる雪割草は、中部日本海側各地の人々に春の訪れを告げる花として、古くから親しまれてきた。

自然界にある同じ花でも、白、赤、ピンク、黄…と、株ごとに花の色と形が多種多様に異なり、その多様性は学問的にも世界一といわれている。しかも角田山には他所には少ない紫の花が多く見られ、その美しさも違々と愛好家は言う。

それがためにブームもあって、福寿草とともにすっかり乱獲されてしまった。以前は季節になれば山のいたる所で見ることができ、墓地の上の山にもあったが、今では自然のままの姿を見るのが難しくなった。

このたび栽培している愛好家の方から、境内に植えてと貴重な二百株をいただいた。大切に育てたい。

(写真提供 長島義介氏)

「寺は風景か」

小川英爾

本堂の建て替え計画が檀家役員会議の話題にのぼって一年になる。この間新築と、解体修理の二通りの考えで基本計画の案を進めてきている。檀家の人たちの声も早くやろう、とても無理、黙して語らずの三つに別れる。確かに工事となると莫大な費用が必要で、この不景気な社会情勢では資金的に極めて困難が予想され、住職としても決断がつかかねている。

しかし妙光寺が一三一三年に創立して以来二度の火災に遭い、一七六四年に現在の本堂が建てられて二百三十年余り。全体が傾いて屋根からは雨漏り、土台も柱も腐蝕や虫食いでポロポロ、壁も一部で落ち始めている。建物として限界に近い状態である。

檀家役員の考えは、難しい時期ではあるが今やらないと、この先若い世代になってお寺のために多額の寄付金を出す人がいなくなってしまうという。事実、近頃お寺の建て替えの話をけっこう聞くが、それぞれの檀家役員、住職も同じように考えているらしい。一方で、もし将来実際にそうなるんならそれはお寺が必要とされていないのだから、今無理して建て替える必要はないのではないか、という外野の声もある。建て替えるとしたらどんな形がいいのかも含めて、そもそも寺とは何かを改めて考えている。

仏教を信仰しているというあのオウム信者が、既成教団の寺に対して「あれは風景だ」と言ったと報道されたことがある。京都や奈良の懐かしいとか、美しいといった風景に寺は大事でも、それ以外には存在意義はないということか。またその後、某有名雑誌の編集長が「既成仏教は習俗、よく言えば文化なんだから、布教だとか時代に即応してなどと考えなくていい。昔ながらのことをしっかりやってくれればいいんだ。」と、私的な場ではあるが言

つたとの話を耳にした。実は世間一般、大方の人達の寺への思いはこうしたものではないのかという気がする。

とすれば寺そのもののあり方や内容はともかく、本堂という建物は周囲の風景にマッチして、寺院建築の伝統技法に則り、法要儀式に見合った間取りで厳かな感じに建てるのが、人々の期待に応える事になる。もちろん予算が優先するから都合がつかなければ、その範囲内で格好のつくように、とりあえず寺らしく作る事が求められる。

新築にしても修理でも日蓮宗の伝統的な本堂を考えたとき、以前から気にかかっていたことがある。それは内陣で僧侶がお経を読む席が向かい合わせになっていて、外陣に座る参拝の人も僧侶の背中を拝む格好で、いずれも正面、御本尊の仏様と向き合わないことである。正面を向くのは導師だけ。大法要で僧侶が多いときはまだいいが、普段の法要ではとても不自然に思える。参拝の人がどっちを向いて拜んでいいのかとまどっている姿がいつも目に入る。僧侶も参拝者もご本尊と向き合って座るべきではないか。

どうもそれは昔寺に多くの修行僧がいた頃、僧侶同士が向き合って論争という形で修行した、それが本堂の形として一般化したその名残りではないかと思う。とすれば当時それなりに意味のあった本堂の形式も、現在は状況が変わっていかにも不自然な感がある。これを荘厳、伝統、歴史性と、形式にのみこだわる姿が外部の人の目には風景としか写らないのであろう。この先形式ばかりで、内容が感じられない風景だけの寺は本当に必要とされなくなるだろう。

寺とは仏様の教えである仏教を学び修行する場である。本堂は仏様を安置し、その教えの世界を形に表現し、僧侶、信徒共に平等に修行する場である。僧侶は修行しながら仏法を伝えていく役割を担っている。

「寺は風景でしかない」とは、仏教が必要とされなくなったのではなく、寺と僧侶のあり方が問われているのである。内容のある寺とその形を作り直していくことが求められていると受けとめている。ただ昔を背負ったマイナスからのスタートなだけに大変である。これまでも大きな協力を戴いて客殿を変え、お墓を変えてきた。本堂工事をやるやららないにかかわらず、寺と僧侶としての自身のありようは考え続けなければいけないと思っている。

心 信

ガン告知を受けて

故遠藤慶作(72才)さん

遠藤慶作さんは教員生活を定年退職すると、長年の疲れを故郷の自然の中で癒すかのように、自宅のある新潟市から五

カ浜の生家に通った。誰も住まなくなつた家を修理して囲炉裏に火をくべ、近所の老人と畑を耕した。ここには大人になつた教え子達がいっつも集まり、酒を酌み交わしていた。

ある日左足に痛みを感じ、勧められて受診したガンセンター病院で、とても例の少ない筋肉の癌と宣告される。早速膝上で切断、以来リハビリと、全身への転移を防ぐための抗癌剤による治療を受けた。経過は順調で転移の心配はないと思われた矢先、肺に癌が見つかった。

手術したが他への転移もあって、回復の見込みはない。自宅に戻り家族の介護を受ける。ことに小学生の二人のお孫さんが、学校から帰ると遠藤さんの寝室に

直行、枕元で宿題やゲームをして過ごす。なよりの安らぎだったという。

住職が暮れにお邪魔したとき「医者は今春まで大丈夫と言ってくれましたが、自分では来月二十六日の七十二才の誕生日を目標にしています」と、笑みを浮かべて人ごとのように話された。

誰に対してもとても心配りのある遠藤さんは、いつも冗談を交えて人をホッとさせる会話をされる。その穏やかで優しい性格、細やかな配慮から実に多くの人に信頼された。小学校長や教員人事を決める教育事務所長をお勤めの頃は、子供達、父母、教員、皆から慕われ、退職後もその交際は続いた。

妙光寺では、五カ浜の人たちの無縁になりそうな墓の心配をし、庭工事の段取りをつけていただいた。夏のフェスティバル安穩には、教え子で琴の先生が門下

生と演奏されるのを手配、いつものように裏で支えてくださった。

目標の誕生日も過ぎた一月三十日の朝、自宅で息子さんに「今日は具合が悪いから会社を休んで欲しい」と言う。駆けつけた医師は本当に春まで大丈夫と言いつつ残して帰ったが、午後容体が急変し夕刻息を引き取られた。

意識がもうろうとする中で「棺桶は用意したか」何を言ってるんですか春まで大丈夫でしょ「そうか間に合わせはいやだな。ご前様はまだみえないか」と、家族と交わされたのが最後だった。自身のことか父親のときの夢なのかわからないが…。



松枯れ被害進む

心配していた松枯れの被害が、すごい勢いで境内とその周辺で広がっています。境内には百本近い松の木があり、その内三十本余りが枯れてしまいました。その中には樹齢二百年はあろうかという大木もあり、見ている心も痛む思いです。

原因は一般にマツノザイセンチュウという数ミリの虫と言われています。



すが、酸性雨とか松林の手入れ不足と言う人もいます。周辺の人家から離れた海岸線の松林では航空防除で、境内の大木は注入薬で予防しており、今のところ効果はあるようです。しかしこの注入薬がとても高価で、限られた木にしかできない状況です。

枯れた木はとももろく、ちよつとした風ですぐに倒れてしまうため大変危険です。分水町のあるお寺で、放置していた木が道路に倒れ、通りかかった車の運転手が死亡、二千万円の補償金を払ったというニュースがありました。

こうした事態を避けるためにも早急に処理作業にかかる必要があります。しかし大型クレーン、特殊技術

が要るため膨大な経費がかかります。これまでも巻町布目の山田勇さんが奉仕で伐採してくれましたが、とても手におえない量です。寺泊町の法副寺さんでは数年前で七百万円かかったとのこと。

幸いにして昨年檀家になられた巻町馬堀の本多クレーンの本多保司さんが、格安で奉仕してくださることになりました。今元気の松もやがて枯れることは必死で、作業上からも残しにくく、予防薬注入の木以外、大半の松を伐採する予定です。

その後には代わりの木を植栽する経費も必要となり、総額で二百万円をみています。つきましてはこの経費の出所がありませんので、檀家の皆さんにご負担ご協力をお願いしなければならぬ状況です。例年の護持会費の際改めてご連絡しますが、ご理解下さい。

作業は四月初旬に行ないます。

角田山御歴代控より(五)

六 長岡藩との関係(つづき)

一 「覚陀山由緒」によると

○ 右馬允様(初代藩主、忠成公)の治世、住職が長岡へ登った節、御目見えを許された。その時に住職から殿様へ、茶三斤五本入と、扇子一箱を献上した。殿様から住職へ沙(夏の和服用織物)二巻と金五〇〇疋下され、御料理も下された。

○ 飛驒守様(二代藩主、忠成公)から御目見えを許された時も右と同じであり、更に八幡宮に畑方を御寄付された。御遊覧の節は当山に御止宿になられた。

○ 大浄院様(三代藩主 忠辰公)にお目見えを許された時も右と同じであった。また、新田三反御寄付になった。

御回領の節は八幡宮に、金三〇〇疋尊牌へ金三〇〇疋、住職へ沙二巻と金三〇〇疋下された。……と記されている。

・「先例とちがう」とあるのは、以前に御回領で近くへお出の時には、妙光寺に御参詣されるのが常だったであろう。

・三代藩主忠辰公が尊牌に金三〇〇疋奉納したとあるので、忠辰公の時、初代、二代藩主の御位牌も安置されていたのであろう。

二 歴代控の中に「宝暦四戌年(一七五四)二月十五日、日進上人は長岡へ登られ、御目見えを許され、御料理と御幕壺対をいただく。其の上、御伝馬(宿駅におかれた公用の馬)仰せつけられ候」とある。

(七代藩主 忠利公(二十二歳時))

○ 三代藩主忠辰公没後、僅か三十年しか経過していないのに、由緒書を提出し、長岡藩士と妙光寺との関係を説明しなければならぬのは何故だろうか。

四代藩主、忠寿公は近江国から養子に入る。六代藩主 忠敬公は常陸国から養子に十八歳で入り、二十歳で没した。七代藩主 忠利公は十五歳で藩主となる。殿様自ら参詣の意思がなければ、家老もすすめなかったのであろうか。

○ 日進上人は公用の馬に乗ることを許され、どんな気持で騎乗されていたのだろうか。

○ 遠藤治部左衛門が妙光寺歴代控

をまとめられたのが、文化七年（一八一〇）

日進上人が長岡へ登られたのが宝暦四年（一七五四）、約五十年前の日進上人のことを記録される時、遠藤治部左衛門は、何を資料に使われたのだろうか。今私が参考になっている同じ古文書を参考にされたのかもしれない。

三、御幕拝領

○ 三十七世日妙上人の時代

「長岡より下し置かれ候御幕、痛み候に付、文化十四年（一八一三）春中願書、曾根御代官所へ差出候摺、同七月長岡表より罷登候様、申来り候に付、文海師宿主として名代に罷登候。

右之通御幕拝領仰せ付けられ候。同十三日帰寺、御礼之義は追々住職・帰国後罷登り候様、仰せ付けられる。同十二年（一八一五）二月、住職御礼に御登遊ばされ候。諸書付は寺

に有之。此一件中野小屋 伊藤五郎左衛門御取持下され候」とある。

・妙光寺歴代控は一八一〇年に記録されたことになっているが、実際はそれ以後のことも記録されていることがわかる。

・「諸書付は寺に有り」とあるが、これに該当すると思われる書類が残っている。

ア・「長岡御幕仕替願書に添えて曾根御役所まで差出候書付」写

内容は長岡藩と妙光寺との関係・由緒と記したもの。後で表として掲載の予定。

イ・「長岡御殿御寄付御幕仕替願、同成就御礼勤往還次第録

日妙代」

①文化九年に提出した願書

宝暦四年に拝領した御幕が御紋所はじめ全体が見苦しくなったので、新しい御幕を頂戴したいという書付。

寺社奉行宛

②文化十年三月に提出した書類

昨年十二月に、住持に長岡表へ登るよう、御達」があった。今春登る予定であったが、今春檀家の用務が重なり、また、京都本圀寺よりの御達して法用かたがた早急に京都へ登らなければならなくなった。誠に恐れおおいことだが、御幕御仕替願のこと、当寺役僧をもってお願い申し上げたい。お伺い申し上げたい。

右の書付を出したところ、承知していただいて、役僧文海を七月七日に長岡へ遣した。

③文海師に持たせた願書

その中に御幕のことが記されている。

・ 御幕 長三丈二尺

幅 五幅

・ 御紋 五ヶ所

・ 幕縄 三ツくり

・ 但紺花色白三色に御座候

(次号はこの項のつづき)

石田誠太郎

闇に消えたムササビの行方を追う①

新潟西高校教諭 藤田久

ナイトウォッチングに出向くと、
ねぐらから出巢後は境内の周辺に滑
空し、木々の茂みに入って姿を見失
うことが多い。すぐに移動をしてく
れるといいのだが休息に入って30分
近くもなかなか動かないでいると、
人の方があくびをし、その場を立ち
去ってしまう。冬場に、この傾向が
強い。我慢くらべこそがウォッチン
グの力量として問われる部分である。

ムササビの直接観察

ムササビは高い木々を利用して滑
空移動する樹上性と夜行性の生活様
式をもつ動物である。このため昼行

性である我々の直接観察すなわちウ
ォッチングには限度があり、追いき
れないところが研究を難しくしてい
る。だからムササビの世界は、まさ
に一寸先は闇の世界そのものなので
ある。

一方、逆に考えればこの見えない
闇の部分明らかにすることこそが
生態研究であり、いづどこで何をし
ているのかという生活に疑問と焦点
を合わせ、その棲息地の環境を重ね、
サーチライトを使ってウォッチング
するところにムササビを追う基本的
なテーマがある。このなぞ解きに興
味津津なのである。

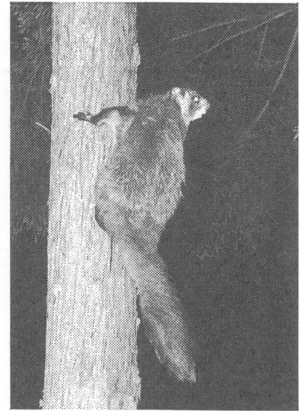
フィールドサインと聞き込み

ではウォッチングの限界をカバー
するために何が出来るのだろうか。い
つてみれば、毎晩訪れるわけにはい
かない弱みがある。これは警戒心の
強い野生動物の研究に共通する問題
でもある。

そこで動物がやってきて生活した
痕跡はフィールドサインとして見え
ない世界の手がかりとなるので食べ
残しなどの食痕、糞、雪上の足跡な
どを求めて明るい時間帯で行なえる
調査を試みる。足下に注意をして歩
くと、やけに地面に細い枝や丸く切
れ込みのはいった葉が散在している
ことに気付く。境内と隣接の熊野神
社の階段では桜の小枝がよく落ちて
いる。“のみ”ですぱと切ったよう
な斜めの切り跡が枝先にあればムサ
サビに間違いはない。門歯で切られた
小枝を手で器用につかみ冬芽や花だ
けを食べてから落とすのである。

このような昼間の情報と夜間の行動を重ねてウォッチングしていれば闇で多少は見えなくても見通しが立ち、待つ余裕に結びついてくる。次に他の動物で使われる「餌付」は草食動物であるためムササビには無理である。周囲は緑に囲まれ餌に少しも不自由しないからである。

そうはいっていても、毎日、暮らしている土地の人達とはどこかで遭遇することは珍しくない。これが繰り返されれば、お互い馴れて気付いても知らんぷりに終わるのだろうか、しつこくウォッチングに通う人物がいれば、なおのこと気になり眼に入ってくるだろう。これが、いわゆる地元の人達は重要な情報源をもちうるので「聞き込み」を入れることが野生動物研究の常識になっている。ふつうは鉄砲打ちの人達が野生動物の情報提供者であるが、ここではもっぱら小川住職をはじめ、家族のみな



さんから情報を寄せていただくので有難い限りである。

遊びのウォッチング

大変なナイトウォッチングはなぜ飽きずに続けているのか、よく聞かれる。楽しみがあるのは長く連続観察ができたときだが、闇に消えたムササビを追うのは楽ではない。寒いときはもちろん、深夜も正直、眠いから同行者がいると助かる。寺の鎌田君も顔を見せてくれるときは本当に心強い。また、ムササビの方も複数現われて騒ぐ場面や息を飲むよう

な行動を時折、見せてくれると気を取り直して通ってくるようなものがある。

時々、公民館などから自然観察会を依頼されることがある。企画が数回可能なときは、このナイトウォッチングを実施することになっている。家族連れで、闇夜に今か今かと巢穴を取り囲み、滑空に思わず歓声をあげ童心にかえる参加者を、そっとウォッチングしている。そうなるのと、こちらも楽しくなり自然のドラマの演出者としては満足するときでもある。枝先にとまったムササビの目がライトに照らしだされ、小学生の子供たちは「ダイヤモンドが輝いているみたいだ」と応えてくれたときには、その鋭い感性ぶりにびっくりさせられた。このように遊び感覚のウォッチングでもやらないと怠け者になりそう。

(新潟西高校教諭)

葬儀の生前契約？

三月に講演で山梨県に行ったおり、会場の近くに会員のYさんが療養でお住まいのことを思い出し、お訪ねしました。あいにく病状が悪くてご夫婦で近くの病院に入院中、電話でお話させていただいて失礼しました。

安穩廟が始まって九七年、この間お元気だった方が弱られたり、入院なさったりと、時の流れを感じさせられます。もちろん心配してた方のお元気な声を聞かせていただいていたこととすることもしばしばです。

高齢者住宅が共同で建てられないかという思いも未だにあります。しかし堅実な資金の見通しと、実際の運営方法の面で、素人にはなかなか難しいことを痛感している状況です。

そこへ先日Sさんご夫妻が三重県から転居してこられました。住職としてはできる範囲のお手伝いしかできませんが、ご自身で社会福祉が充実していると言うことで、三条市の市営住宅を決められました。

近頃葬儀の生前契約が話題になっています。自分の葬式を生前に決め、保険なり現金で支払いをすることで、もしもの時に周囲の人を慌てさせないというものです。盛大な葬式を希望される方にはいいかもしれません。でもその時点で請け負った会社が潰れていなければの話ですが……。

葬式にお金をかけない方法はいくらかでもあります。仏式を希望されるならご遺体、ご本尊、三具足（花、

番、灯明）に僧侶がいればできます。また骨葬といって、自宅でお別れの集まりをして火葬、お骨にしてお寺で葬式を挙げる方法もあります。これなら斎場も不要です。

むろん信仰を持たなければ告別式があつて葬式をしないのも自由で、葬式してないから火葬、埋葬ができませんということはありません。

妙光寺の高齢者住宅の見通しはまだですが、依頼の有無は関係なく葬儀のご相談にはお答えできます。商業主義に乗せられて右往左往することだけはやめた方がいいと思います。安穩廟二基目も残り僅かになってしまい、三基目をどう進めるか困っています。



生きていくといふこと



今を逃すとあとは二万年先にしか見ることの出来ない彗星が世の中を賑わせている。娘達と観察のチャンスをうかがっているのだが…。

この気の遠くなるような大きな天空の下で、ちっほけな私たちは今日もさまざまな悩みや、問題を抱えながら生きている。

私のほんの一例だけど、少し前に娘の不登校で悩んだことがあった。あまり大騒ぎするのも良くないと考え、娘の前では普通にしていようと心がけた。でもその裏では友人の言葉にポロポロと泣いたり、教育の本を読みあさったりと、今思い出すとおかしくなるうろたえぶりだった。

過ぎ去ってしまったら笑って思い出せる程度の悩みなんてとるに足りないことなのかもしれない。でもそんなとき、私は胸にはつきりとした痛みを感じるがあった。ツツと何かが体の中心を走るような、不思議な感覚だった。心が痛むような感覚。ふと心つてもものはどこにあるのだろうと思った。

ベストセラーの『脳内革命』を読んだ。「心で考えること」は抽象的な観念ではなくて、きちんと物質化された体への作用だという。人間の生き方の指針を科学的に説明しているので、説得力はすごい。世のため人のためにならない事をする、脳は

そのホルモンの作用で滅びの方向へ誘導し始めるといふ。でもこれはほんなに科学が進歩する以前から、多くの宗教者の説法と同じ。

心も命も科学的にいえば、まったく簡単なことのように説明がつく。でもそれなら何故こんなに生きていくといふことはしんどいのだろう。どうして悩みなどなくもつと淡々と生かされてくれないのだろう。結局科学と宗教、どちらもいまだに私の悩むという現象を、根本的には説明してくれていないような気がする。

目にみえない心の悩みを抱えていると、手軽に直接手に入れることができる目の前の喜びを求めたくなる。それがまた新たな悩みを引き起こすことがある。生きることは本当に不思議なことだと思ふ。

小川なぎさ

行事案内

「ご判さま」二十八日に

四月二十七、八日の二日間にわたる毎年の「ご判さま」ですが、昭和三十年代までは近郷近在すべて村休みとなつて、妙光寺へ向かう人の列が続いた盛大なお祭りでした。近年農作業開始の時期が早まったことなど、社会の変化でお手伝いの当番の人たち、参詣の人も集まりにくくなっていました。

検討を続けた結果、今年から四月二十八日の一日だけに集中して催すことにしました。その日程は別紙にご案内した通りです。日曜日ですので賑やかになるでしょう。お出かけください。

例年この日の施餓鬼塔婆供養と、供米袋をご案内、お願いしてきました。このたび今年からの日程変更にあわせて、供米袋を廃して奉納とし、塔婆の申し込みと一緒に袋にしました。左はじに氏名欄がありますので忘れずにご記入下さい。

稚児募集

「ご判さま」に出る稚児を募集しています。現在男児は一杯で、女児四名にあきがあります。衣装の都合上小学校入学前までが適当です。檀家に限りません。早めにお申し出下さい。費用は一人三千円です。



あつがき

長かった今年の冬もようやく明け、春らしく感じられるようになったのはお彼岸過ぎでした。この分では梅と桜と一緒に、四月十日頃盛りになるかと思えます。そうなれば鶯も鳴き始めるでしょう。

今年こそは正常なペースで発行しよう、まずはお彼岸前にと考えていました。それが寒さに負けて、二月下旬、風邪によると思われる激しい腹痛で夜中に病院へ。注射の一本も思っていたのが、そのまま一週間の入院になってしまいました。

たった一週間でしたが、どんなに病院で手厚くされてもやはり自宅が一番、そう実感したい経験でした。今は快調です。

春風とともにお届けするには爽やかな内容に乏しかったかもしれせん。また次回にと言ふことで。

(小川記)